20190929「イエスの憐れみに支えられ」マルコ８：1-10

「イエスの憐れみに支えられ」マルコによる福音書８章１－１０節

森島　牧人　牧師

「四千人に食べ物を与える」という小見出しが付いた今日の聖書は、先日学んだマルコ６章の「五千人に食べ物を与える」というところとよく似ているように見えますが、６章と８章には大きく違っているところがあります。

まず、６章の「５千人を超える人々がいた」場所ですが、そこはカペナウムの外れで、少し離れたところには村があり、緑にも恵まれた気持ちの良いところであったことが、人々を青草の上に座らせるように主がお命じになったということで分かります。一方、８章の方は、主の群衆への命令が「地面に座るように」であることから「４千人を超える人々がいた」のは荒れ野であったと分かります。しかもその地は異邦の地でもあったのです。それ以外にも異なっているところ、それは、６章の方は「群衆のその日の夕食」の心配でしたが、８章の方は「荒野で３日間食事をしていない群衆への食事」の心配でした。

マルコ福音書には「荒野」がよく出て来ますが、旧約の歴史、イスラエルの民の信仰、そして主イエスの地上での歩みに一貫してあるのは、「荒野」という状況でした。イスラエルの民の信仰の起点は、彼らが荒野で見聞きしたことの中にあったのです。この荒野という視点ですが、聖書は「私たちの日々の生活の中にある心の中の荒野」を示唆しています。死と神の裁きしかない荒野が心の中に広がるその時、私たちは初めて主イエスの姿を見、そのご生涯の意味を理解し、主の愛と優しさの中にいることに気付かされるのです。

さて聖書には、５千人の夕食の時と同じように、４千人を超える群衆の食事のことでいら立つ弟子たちの様子が描かれています。・・・主の奇跡と癒しだけを求めて、何処までも付いて来る自分勝手な群衆。ほおっておけばいいのに、そんな群衆を受け入れようとなさる主イエス。すべては主イエスの「愛」のせいなのだ。「愛」などと言わずに、ルールに則ってすべてを処理して下されば、我々が犠牲になることもないのに。ああ、しかし、そんなことは十分に知っていながら、自分たちはここまで主に付いて来てしまったのだ・・・。自身にも腹立ちを覚えるこの弟子たちの姿は神やモーセに繰り返し不満を募らせた出エジプトのイスラエルの民の姿と重なります。弟子たちも荒野で、疲れ切っって荒んでしまった心で、主イエスへの不信を募らせたのでした。

少し前に、目の当たりにしたはずの「パンと魚の奇跡」を忘れてしまっていたこの弟子たち。人間は経験を重ねながら成長して行くはずですが、この場面の弟子たちにそれを見ることは出来ません。主と共に歩んでいながら、この時彼らの信仰はどん底に落ちてしまっていたのでした。このような状況になってしまうことは弟子たちだけでなく、私たちにもあります。それは、生きて行く途上で、心の中に荒野という荒んだ状況が出現した時です。果てしなく続く荒れ野に立ちすくむ私たち。

しかし、ここで私たちが忘れてはならないのは、２度目の「パンと魚の奇跡」によって弟子たちをどん底から助け導かれた主イエスが、荒涼たる状況の中の私たちの前に現れ、どこまでも共にいてくださるということです。私たちは、イスラエルの民や弟子たちと同じように、今も生きておられる主イエスの憐みに支えられて、生涯を歩ませていただくのです。